

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「現代社会におけるメディア研究」の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2016年9月30日（金）

掲載号の発行：2017年9月（第20巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください（本学会HPの「学会誌」ページ参照）

タイトル：現代社会におけるメディア研究

担当エディター： 秦 かおり（大阪大学）
佐藤 広英（信州大学）
佐藤 彰（大阪大学）
岡本能里子（東京国際大学）

メディア研究の歴史は決して浅くない。メディアを研究する分野は、独立した「メディア研究」という枠だけに捉われず、歴史学、コミュニケーション学、言語学、社会学、心理学、教育学、カルチュラル・スタディーズなど、多くの分野で扱われてきた。分析媒体は新聞や雑誌などあらゆる活字媒体から、テレビ、ラジオ、映画などの映像音声媒体、そしてその両者をまたぐインターネットまで多岐にわたっている。その分析対象も技術の発展に伴い、さらなる拡がりを見せる。伝統的なメディアメッセージを発信する側の研究からオーディエンス研究、そしてインターネットや携帯電話、スマートフォンの普及により、今までオーディエンスであった人びとがメディアにことばを乗せて発信できるようになり、しかもそれが相互行為的に行われる時代となった。これにより、発信側－受信側という分け方が難しくなり、メディアメッセージはますます多様な分析方法を必要とするようになってきた。

さらに、嬉しくも悩ましいことに、技術の発展は、私たちに多様な研究素材を提供してくれるようになった。例えば新聞研究1つをとっても、紙媒体の新聞と、新聞社が提供するウェブサイトの研究、アーカイブスを利用した研究、そしてそれらを量的に見るか、質的に見るかという方法論の違いも絡んでくる。さらに、画像映像技術の発展によって、メディアメッセージの分析は単にことばだけでなく非言語行動や様々な記号的要素にも及ぶこととなった。そして今日、以前にも増してメディアは政治的・文化的・社会的に甚大な影響を与えるようになってきている。メディアの研究ほど学問が実社会と結びつき、成果の社会還元性が高い分野は少ないのではないだろうか。このような現状を踏まえて、本特集ではメディアを多角的に捉え、「現代社会におけるメディア研究」と題して、様々な角度からのメディア分析論文を募集する。

これまで『社会言語科学』では多くのメディア関係の論文が掲載されてきたが、「メディア」が特集のテーマとなったことはなく、一般投稿論文として取り扱われてきた。これは1つには、社会言語学会研究大会に付随する形で「メディアとことば研究会」が随時開かれ、それが『メディアとことば』という論文集となって出版されてきた歴史があり、発表の場が他にもあったという事情もあるかもしれない。しかし考えてみれば、これは社会言語学会に非常に相応しいテーマの1つである。メディアに関

する研究は、上記のとおり学際的であり、社会言語科学会の設立趣旨にもある「既成の学問領域を立脚点としつつ、その枠を越えて、関連領域の研究者との交流」を行うために最良のテーマだからだ。

具体的には、例えばメディアの中の言説を捉えてそこで何がどのように語られているのかを扱うメディア・ディスコース研究、またメディアを通して相互行為的に構築されるものに着目するナラティブ研究や、メディアメッセージを介して現れる現象を批判的に捉える批判的談話分析、言説だけでなくその他の要素も取り入れるマルチモーダル分析、教育や規範研究を含めたメディア・リテラシー研究、メディアのことばやメディアの利用行動から人びとの心理にせまる心理学的アプローチなどがまず挙げられるだろう。

こうして列記していくと、「メディア」を研究するということは、ことばをはじめとする様々な手段で表現されたメッセージの分析を介して、人・文化・社会を理解していく作業であるように感じられてくる。これらを理解し明示し、共有すること、批評しあうこと、そして社会に還元していくことは、現代社会に生きる私たち研究者に求められた重要課題ではないだろうか。メディアに関する様々な角度からの論文が掲載されることで、社会言語科学会の学際的な側面が遺憾なく発揮され、会員の方々それぞれに、そして現代社会に資する特集となることを期待したい。